

占いは信ずる ものではなく “使うもの”です。

人物 **CLOSE UP** クローズアップ



占い師 竹村亜希子さん
(たけむらあきこ)

プロフィール

昭和24年名古屋市中区に生まれ、東洋本橋易字による有限会社「占いの玉手箱」(052-935-4170)を昭和54年に設立。同社代表取締役である。鑑定、イベント企画、執筆活動に名古屋を中心に活動を展開している。

名古屋の占いブームの仕掛け人

昨今、迷える現代人の注目が“占い”に集まっている。利用者は若い女性から企業戦士までさまざま。占ってもらう内容も恋愛から仕事運、新商品名までとバラエティに富んでいる。

従来神秘的で暗いイメージが強かった占いを、一つの“情報サービス”と考え明るいイメージで打ち出したのが、名古屋の売れっ子占い師、竹村亜希子さんである。

企業のパーティに占いコーナーを設けるなど、イベントとしての占いを提案し、名古屋に占いブームを巻き起こした。

個人鑑定からイベント企画まで取りしきる有限会社「占いの玉手箱」を、昭和54年に設立。現在30名のスタッフを率いる代表取締役である。

昨年大盛況を呼んだ「岐阜未来博」。パビリオンの一つ「世界占い館」は「占いの玉手箱」によってイベントプロデュースされ、5つの指に入る人気ぶりを見せた。

仙人の教え

竹村さんが占いと出会ったのは中学2年生の時。白装束に杖を手にした仙人風の男が、突然家にやってきたことから始まる。

男は熊本で修行し、人相、手相、姓名学、易学に始まり、易と対抗すると言われる命宮学まで極めたまさに“仙人”であった。「この家を夢で見た」と言ってお客先から動かず、食客としてその後5年間住み込むことになった。

竹村さんは学校が引けると、毎日夜遅くまで、仙人から占いのあらゆる教えを受けた。よく当たると評判の占い師の基礎は、このようにして築かれたのである。

資本金二千円也

もっとも、その頃は、占いを生業とする気は毛頭なかった。高校卒業後銀行に勤め、結婚し、子宝にも恵まれた平和な専業主婦の生活を送っていたのである。

そんな彼女を占いに駆り立てたのは、最近主婦層によく現われる「このままで人生を終えたくない。私も何かしたい」という切実な思いだった。

「私にできることは占いだ」と、資本金2000円で突発的に始めた商売だった。内訳は名刺代と交通費が各1000円ずつという、いたって簡単な幕開けだった。

最初は会社の宣伝担当の人を訪ねて、明るいイメージのファッションな占いのイベントをしませんかと聞いて回った。

すぐにイベントの予約は取れなかったが、興味を示す人は多く、個人鑑定の機会にも恵まれ、初日の売上は1万8000円(当時は1件3000円の料金)にものぼった。

口コミで次々と評判が広がり、占いの宅配サービス(当時のみ)という珍しさも手伝って、売上は上々。数ヶ月後には事務所を構えることができた。現在は、料金1件1万円より。

占いは一つの情報

こんなこともあった。昭和56年の「名古屋オリンピック」の件では、テレビで「実現されないでしょう」と発表。事実そのとおりであった。

アメリカで起こった「ブラックマンデー」もいち早く予測し、友人に株の売却をすすめて感謝されたという。

現在はスタッフとともにイベント、個人鑑定をこなす一方、毎月30本の原稿、平均5、6本の講演を抱える多忙の身である。

竹村さんは占いとのかき合い方についてこう語る。

「他人の言うことで自分の人生を左右されるなんて馬鹿らしいですね。占いは一つの“情報”として自分の考えの中に取り入れ、答えを出すために利用するもの。“信ずるもの”ではなく、“使うもの”なのです」